

論文の要旨

論文題目 14-16 世紀日本絵画のイコノロジー
- 雪舟筆「四季山水図巻」を中心に -
氏名 HAIJIMA Agnese
学位 博士（学術）
授与年月日 平成 21 年 3 月 25 日

はじめに

室町時代に最も高い名声を得た画家雪舟（1420-1506 年）筆「四季山水図巻」（毛利博物館蔵、以下「山水長巻」と呼ぶ）は、画家が中国旅行から帰った文明 18 年（1486 年）に、庇護者である大内氏への献上品として、山口の画室で描かれた作品である。先行研究によれば、15 メートル以上もの長大な作品のなかには中国の様々な伝統的な絵画モチーフが画家によって時に自由にアレンジされて描き込まれている。また、右側の冒頭の部分から、春に始まる四季が描写されており、さらに一日の四時と天候の表現も見られる。四つの場面に「瀟湘八景」のテーマが、二ヶ所に「西湖」の風景が描写されている。しかし先行研究にはまだ指摘されていない要素として、中国旅行の体験に基づくこの画家に特徴的なモチーフも見られる。また老荘思想に背景を持つモチーフ、例えば、作品のあちこちに見られる丸い穴のあいた岩、平な岩などと、これとも関連する吉祥的なモチーフ、例えば松、竹、梅などの存在も注目に値する。

同様に、先行研究によれば、「山水長巻」は十五世紀日本の山水画のコンテクストにあり、南宋絵画（1127-1279 年）、特に夏珪（13 世紀の初め）の影響を受けた作品であるとされるが、いくつかの場面の筆法などには明代の浙派の影響が指摘されており、またモチーフの選び方、描き方などには雪舟の独創的な表現が見られる。

雪舟の時代背景を探ると、「山水長巻」と彼の芸術には三つの文化的中心地が影響を与えたことが明らかになる。その一つは室町將軍の影響力の下にある京都であり、もう一つは中国と経済的・文化的関係が深く、「小京都」とも呼ばれた山口であり、三つ目は雪舟が応仁の遣明使節の一員として渡った中国である。

1. 先行研究と問題点

これまでの日本中世絵画の先行研究は、島田修二郎、宮崎法子などの数少ない論文を除いて、そのほとんどが様式的な面に注目してきた。「山水長巻」の先行研究も様式的な面を論じるものが多い。しかし西洋美術では、様式、つまり絵画の外側（スタイル、筆法、彩色など）以外に、イコノロジー、すなわち絵画の内側（描かれたモチーフの起源と意味）を探る研究が非常に重視されている。

2. 論文の目的と方法

以上のような理由から、本論は「山水長巻」に描かれたモチーフの源泉と意味を探ることを目的とした。日本中世絵画の先行研究の主流から離れて、「山水長巻」を中心とする雪舟の晩年の作品を新たな視点から分析することが、この論の課題である。

研究の方法としては、2002年から2008年にかけて、日本、中国、韓国、台湾、米国とヨーロッパの様々な美術館で雪舟、室町絵画、中国絵画の作品を数多く実見し、かつ関連資料の収集を心がけた。とくに、2006年に山口県立博物館で行われた雪舟展「雪舟への旅」の際に「山水長巻」の実物を調査しえたことは非常に重要だった。作品以外に、中国の画論、文学的な作品、例えば、室町画賛と漢詩などの調査はイコノロジー的な研究の重要な基礎となった。また日本人の研究の他に、これまで日本には紹介されていない中国人とアメリカ人の英語による研究の成果を積極的に取り入れ、雪舟と室町絵画を再考した。

3. 論文の構成

本論文では「山水長巻」に描かれたテーマについて、1)「瀟湘八景」、2)「西湖」、3)老荘思想、4)「四季」の四つの観点から章ごと論じる。第一章と第二章で分析した「瀟湘八景」と「西湖」のテーマは室町絵画で非常に流行したもののだが、それぞれが作品全体を構成する重要な部分となっており、一つのまとまった空間単位(スペース・ユニット)を成している。第一と第二章のもう一つの共通点は、ここで扱われている絵画のテーマが文学や宗教思想と密接な関係をもっていることである。したがって本論文の前半ではまず、これら特徴的なテーマを持ついくつかの空間単位について、文学やその他の文化伝統との関わりにも注目して考察する。論文後半の第三章では、作品全体にちりばめられている「老荘思想」に関するモチーフを扱い、第四章では「山水長巻」に時間軸と全体的バランスを与えている「四季」のテーマについて分析する。最後に終章では、作品の統一的解釈について述べる。

4. 考察と結論

第一章においては「山水長巻」それぞれの空間単位に描かれた四つの「瀟湘八景」の四つのテーマ「漁村夕照」、「瀟湘夜雨」、「煙寺晚鐘」、「山市晴嵐」について四部に分けて考察した。先行研究に、これらの場面の意味を探る研究は見当たらないので、筆者はこれらのテーマが中国文学と共有する暗示的な意味、中国画論、当時の中国と日本の政治的・経済的背景、画家の伝記などを探った上で次のような解釈を行った。

中国の文献から、「瀟湘八景」を初めて描いた宋時代(960-1279年)の宋迪(1015-1080年)は当時の中国の政治的な状況、自己の追放体験などをこのテーマによって暗示した可能性がある。雪舟が山口へ下った理由は今日まで明らかにされていないが、彼もまた「山水長巻」に描き込んだ瀟湘八景のテーマ「漁村夕照」と「瀟湘夜雨」の場面において、追

放の意味を表わす理由は十分にあったように思える。また、「瀟湘夜雨」の空間単位を論じる際に、中国的遠近法である「三遠」の技法外的な意味にも触れ、ここで雪舟も用いている「三遠」の一つ、「平遠」が、中国において社会構造の枠外にいる人、すなわち、追放された人々を暗示するために使われる場合があったことを示した。他方、「漁村」、「船」のモチーフは中国文学において引退、理想的な修行場を暗示する伝統があることを指摘し、特に「漁村夕照」の場面で雪舟は理想的な修行場を表わした可能性があるとして述べた。この場面以外にも「山水長巻」には初夏に当たる空間単位に「漁村」、「船」のモチーフが描かれている。「漁村夕照」の秋の季節に当たる暗い、悲観的な要素と対照的に、「初夏の港」の場面は明るい空、水面、木の葉などによって楽観的に表現されている。このように同じモチーフのヴァリエーションによって雪舟は対比的な意味を表したと考えられる。この場面には、实景にしか見られないモチーフ（当時の船旅用の大型船、植木鉢、干した衣服など）の付加によって中国の定型からの逸脱が明らかに見られる。つまり、「初夏の港」には、雪舟が中国への旅の途中で見た实景が大きな影響を与えたと考えられる。また、この实景を取り込んだ賑やかな港の風景を描くことによって、多くの貿易船をもち、雪舟の中国への旅を実現したパトロン大内氏の海上での実力を称える意図もあったのではないかと推測される。

第三部では作品冒頭に置かれた「煙寺晚鐘」の場面を取り上げ、そこに描かれた険しい山道を登る高士と弟子、遠景の霞みに囲まれた寺が、中国の文学的・宗教的背景において悟りを象徴していることを指摘した。この場面には雪舟の禅僧としての世界観がはっきりと表現されている。第四部では「山市晴嵐」の空間単位について考察し、近景の市場、人々の賑わい、酒屋などのモチーフによって一見して世俗的な場面のように見えるが、その遠景にある「洞窟」、「丸い穴の岩」、松の木などのモチーフは、中国の文化伝統から判断して聖なる世界への願望を表していることを指摘した。このことはこの空間単位のタイトル「山市晴嵐」によっても暗示されており、「山市」は人間の世俗的な楽しさを、「晴嵐」は宗教的悟りを象徴している。したがってここには、人間は世俗的な楽しみを通過して聖なる世界をも求めなければならないという画家の禅仏教的なメッセージが読み取れる。また、中国文化の伝統において「山市」は国の経済的な状況を暗示するトポスであること、「瀟湘八景」を初めて描いた宋迪の時代の中国は経済政策の失敗によって国民が貧困に苦しんでいたことなどから、「山市晴嵐」のテーマに国の経済的失策への批判を読み取る場合もあった。しかし雪舟の「山市晴嵐」は楽観的な場面であり、この場面によってパトロン大内氏の経済的実力を暗示し、称える意図もあったかもしれない。このように「煙寺晚鐘」と「山市晴嵐」はともに宗教的な背景をもつが、前者では宗教的な目的は聖なる、汚れない自然を通過して到達するものと考えられているのに対して、後者では世俗的・人為的な場を通過して、あるいはその場を踏まえて到達するものと考えられている。

第二章の「西湖」のモチーフについては、雪舟の描いたこのモチーフに見られる典型からの逸脱の問題に注目した。まず、中国と日本における「西湖」の典型的なイメージとその源泉を探り、その上で「山水長巻」の「西湖」モチーフが、それまでの雪舟と他の日本

および中国絵画に描かれた「西湖」モチーフと異なっていることを明らかにした。

第三章では、これまで注目されてこなかった「山水長巻」における「老荘思想」のモチーフを、他の多くの雪舟作品にも触れながら分析した。その際、先行研究に見当たらない雪舟絵画における「気」の表現、植物に与えた暗示的な意味と雪舟による解釈、長寿のモチーフと雪舟作品に見られる規範的な岩のタイプ、その源泉と背景にある思想に焦点を当てた。その結果、雪舟は「気」を表すために正反対のもの、たとえば、嵐と晴れた空、動的筆法と静的筆法、色の濃淡、モチーフの組み合わせの疎密を交互に配置していることを明らかにした。植物に関しては、雪舟がこの作品の何か所かに描き込んだ松と梅について、中国の文化伝統における多数の意味を参照しつつ、個々の場面の意味解釈を示した。また、これまで言及されたことのない丸い穴の岩の意味を探り、太湖石のモチーフから発展したものとして、老荘的長寿の意味だけでなく、聖なる世界の存在を暗示していると解釈した。雪舟はこのモチーフを何か所かに描いて聖なる世界への願望を表したと考えられる。

さらに「山水長巻」に見られるその他の岩のタイプにも注目し、海に囲まれた、細長い仙島型の山、平な「闕型」の山、上に突き出た山、傾いた山型に注目した。最初の仙島型の山は雪舟の縦向きの山水画よく登場するが、「山水長巻」には「西湖」の場面に部分的に描かれているだけである。この型の岩を雪舟は一般的に近景の水面の向こう側の遠景に描いており、それは別の世界を象徴していると考えられる。次に、「山水長巻」に何度も登場する平な「闕型」の山は中国芸術において古くから使われており、宗教的な意味と結びついている。仏教芸術では聖像の台座としても使われ、たとえば仏陀が瞑想する石の台座はこの形である。雪舟はこの平らな山を自然のなかに置き、その上に細い、曲がりくねった木を描いた。これらの木は恐らく聖像に代わるもので、土のない岩の上に生える木は修行中の辛さを暗示するように思える。最後に上に突き出た山、張り出した山型も中国文化において、その下に聖なるもの、大切な、あるいは高位の存在が置かれていることを暗示している。「山水長巻」においては多くの場合、このような岩（山）の下に修行場へ至る道が描かれており、これらのモチーフから本章では雪舟絵画における深い宗教性を裏づけた。

第四章に論じた「四季」のテーマは、「山水長巻」の全体的な解釈に非常に重要である。ここではまず中国絵画における四季の意味とその日本への影響について述べ、それから雪舟の他の絵画とも比較しながら「山水長巻」の四季の意味について考察した。中国の文化伝統では、四季の全体は完璧な、理想的な世界を象徴し、また政治的には良く治められた国家の安定性をも暗示する。この思想を表す絵画は日本でも描かれていることから、「山水長巻」に描かれた四季の一廻りは中国の伝統的な宇宙観や世界観を受け継いだものと結論づけた。このことからまた、「山水長巻」が、大内氏の長寿の祝いと政治的な安定への願いを込めた献上品であったという解釈が可能だろう。

最後に終章でこの作品を全体的に解釈し、「山水長巻」は外面的には中国的風景のなかの旅を描いており、内面的には中国の伝統的な文化、思想、宇宙観、世界観を継承していること、しかしそこには雪舟の庇護者への感謝と祝福、画家としての創造的個性と特徴も十

分に表現されており、比類のない完成された作品になっていることを述べた。

以上に論じた「山水長巻」のモチーフは、雪舟絵画だけではなく、室町絵画全体に広く流行していたものである。したがって、本稿における雪舟作品のイコノロジー的解釈は、室町絵画全体の理解と再解釈にも役立つことを期待している。